

原風景

原風景とは、自然の風景を指す。人間の活動による人工的な風景とは異なり、自然のままの風景を指す。原風景は、人間の生活と密接な関係にある。人間の生活は、自然の風景の中で営まれる。自然の風景は、人間の生活を支える。原風景は、人間の生活と自然の風景を結びつける重要な要素である。

原風景は、人間の生活と密接な関係にある。人間の生活は、自然の風景の中で営まれる。自然の風景は、人間の生活を支える。原風景は、人間の生活と自然の風景を結びつける重要な要素である。

回帰

星は瞬いていた。

深い海のような暗闇の中で不思議な音を奏でながら、きらきら、きらきらと瞬いていた。

月は蒼白く浮かぶ。

淡く大きな円を描きながら、きらめく星の中心。

緊迫した静けさの合間でゆっくりととろける。

大気はシルクのように滑らかに動いて、木々を撫でる優しげな風を作り出す。

海は僕らを抱きしめて、輪廻の旅を繰り返す魂のように雨を大地に降らせる。

帰りたい。

涙があふれた。

帰りたい。

山並みに消えていく真っ赤に燃えた太陽に。

果てなく澄んだ空気に包まれ青く輝く空に。

限りなく透明で大気の色が溶け込んだ海に。

もう一度出会いたい。

もう一度感じたい。

還りたい。

僕はどこことなく遠くを見つめる。

定まらない視線の先にはなにもない。

どこかへ還りたい。

もう場所さえも思い出せない、遠い、遠い彼の地。

全てのものを飲み込んで

薄青い空にぼやけた雲が浮かぶ。

初夏の生温かいぬめぬめとした風が黒い髪を巻き上げた。

触れるか触れないかの瀬戸際を行き交う指先のような感覚。

今日の空気は重くしっとりとして絡み付いてくるようだった。

見上げた空には鳥が舞い踊る。

下を見ればアスファルトのうえを人々が行き交っている。

建ち並ぶビルの群れは遠く霞んでみえる。

広がる新緑の緑は美しい。目に眩しい。

そこからこぼれる日の光。

かすかに揺れ、ささやくように触れ合う葉。

向かいの窓が反射する。

遠くにみえる山並みは今にも消えそうなほど薄い。

目の前をゆっくりと舞う純白の蝶は、心もとなくて...

あわただしく過ぎ行く人々の渦。

止まることのない忙しい人々の群れ。

どこを目指し、なにを目指し、彼らはいつかどこかへたどり着くのだろうか。

広がる薄青い空はどこまでも続いていく。終わりなく続いていく。

あわただしい人類を、飛び交う鳥たちを、遠く光る車の影を、照らされるタイルを、木漏れ日戯れる木々を、聳えるビルを飲み込んで、全てのものを飲み込んでただ続いていく。

時は永遠に続く流れ。

あれは一瞬。これも一瞬。

時は一瞬の繰り返し。

彼岸花

頭上には大きな大きな月が上がり、一面に白銀色の光が差し込んで、見慣れたはずのこの部屋もまるで水底に沈んでしまったかのように思えて…。

開け放たれた窓の外には、あふれたばかりの血の色のように燃え上がった大地が広がっている。

黄緑色のか細い茎の上に、夜空に舞う大きな花火のように咲き乱れる花。華。

四方に伸びた花びらは妖艶で、そこから更に八方へ広げられた雌蕊はあのひとに群がる幾本もの女の腕のようにみえた。

忌々しい…。

花は広いこの庭いっぱい、狂ったように咲いている。

漆黒の空気の中に幾千万の死人花。

あなたの眠るこの庭を真っ赤に染め上げている。

あの雌蕊のような誰とも知らぬ女の腕に、いつか盗られるくらいなら、いつかどこかへ逝かれてしまうくらいなら、いっそ誰の目にも触れぬようにと、この彼岸花の下にあなたを隠した。

あなたは、漸くわたしだけのあなたになった。

わたしだけ、わたしだけのあなた。

花はあなたを苗床にして、いつまでも繰り返し咲き続けるだろう。

あなたは繰り返し生まれ咲いて死んで、ずっとわたしだけのもの。

目撃者は白銀色の大きな月だけ。

わたしはこの胸に沢山のあなたを抱えながら、抱きしめながらゆっくりと眠りに就く。

永遠に、わたしだけのあなた。

もう離さない。

微笑

終わりのない闇がどこまでも続いている。

遠く彼方まで、深い深い闇が広がっている。

吹く風もなく、流れる水もなく、見上げる空も、僕ときみのほかになにもなく...

僕のかすかな息遣いと、きみの唇からこぼれる笑い声だけが響く、暗く歪んだ終わりの続く世界。

きみは微笑んでいた。

右も左も、天と地の差も判らないこの空間で横たわる僕のまわりを、まるで中空を舞い踊るように飛ぶ蝶のようにくるくるとまわりながら。微笑んでいた。

きみにはなにもなく、殺意さえも感じられない。

そこにあるのは、無邪気な笑顔だけ...

形のいい唇からこぼれる笑い声はまるで歌うように高らかで、愛らしい大きな瞳は閉じられることを知らず焦点は定まらない。幼さを残したやわらかな顔容は微笑したまま凝固している。

きみの細身にまとわりつく白い、白いワンピースは僕ときみと現実を遮断する。

その柔らかでしなやかな手に持たれた油脂に汚れたナイフはきみに似合うはずもなく、まるで陳腐な玩具のようだった。

火のように痛む全身だけが、現実を僕に教えてくれる。

よかったね。

これで僕はずっときみのものだよ。

もうきみの側からいなくなることはなし、ほかのだれかのところへいくこともない。

ほかのだれとも言葉を交わさず、視線を合わせることなく、きみの側にだけいるよ。

僕の抜け殻だけ、が。

もう、息も吸わない。

いつまでも僕のまわりをふわりふわりと飛び続けるだろう笑顔にきみに、心のない僕の抜け殻だけ、あげる。